

2015年度 選考結果

ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援

ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援は、ヘルスケアの視点を重視したより良い社会への寄与を目的として、心とからだのヘルスケアの分野で活躍が期待される市民活動・市民研究を応援する助成プログラムです。

第15回となる本年度は、新規助成として、全国から143件のご応募を頂き、そのうち8件（助成総額1,500万円）が、また、継続助成として8件（助成総額1,500万円）が、それぞれの選考委員会による厳正なる選考の結果、助成対象プロジェクトとして選ばれました。

■ プログラム創設の目的

- (1) ヘルスケアの領域で今後一層の活躍が見込まれる市民活動を発掘し、その活動を後押しすること。
- (2) これからの社会の担い手として重要な役割が期待される市民活動自体の社会的認知を高めること。

■ プログラムの特徴

- (1) ヘルスケアを広く捉え、本業（医薬品の提供や医療）だけでは賅えないヘルスケアの分野で活動する市民団体を支援対象としていること。
- (2) 政府や自治体などの公的機関からのサービスや社会資源の十分に整っていない分野の市民活動・市民研究を重点的に支援していること。
- (3) 団体としての過去の実績ではなく、その団体が取り組もうとしているプロジェクトの獨創性・試行性に評価の重点を置いていること。
- (4) 単年だけではなく、最長3年間の継続した支援も行なっていること。
- (5) プロジェクトに携わる人の人件費や、事務所家賃・光熱費などの事務局経費も助成すること。
- (6) 中間時点でのインタビュー実施によるフォローアップも行なっていること。
- (7) 市民活動の社会的認知の向上を目的とした広報活動も行なっていること。

■ 助成対象（新規助成、継続助成2年目・3年目）

「中堅世代」の人々（主に30・40・50歳代）の心身のケアに関する課題。

■ 重点課題（継続助成3年目）

- (1) 中堅世代の人々（主に30・40・50歳代）の心身のケアに関する課題。
- (2) 心身のケアが得ることが困難な人々の健康の保障に関する課題。
- (3) 上記各課題の解決に関連したヘルスケアを重視した社会の実現に関する課題。

■ 選考委員会

〈新規助成〉

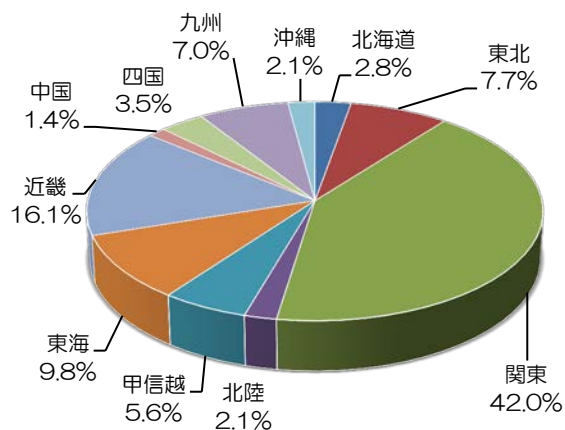
委員長	稲沢 公一	東洋大学 ライフデザイン学部 教授
委員	井ノ上美津恵	認定特定非営利活動法人浜松 NPO ネットワークセンター 代表理事
委員	川島 ゆり子	花園大学 社会福祉学部 教授
委員	前野 一雄	独立行政法人地域医療機能推進機構 理事
委員	豊沢 泰人	ファイザー株式会社 執行役員 経営政策管理本部長

〈継続助成〉

委員長	武井 秀夫	千葉大学 名誉教授
委員	井ノ上美津恵	認定特定非営利活動法人浜松 NPO ネットワークセンター 代表理事
委員	川島 ゆり子	花園大学 社会福祉学部 教授
委員	前野 一雄	独立行政法人地域医療機能推進機構 理事
委員	豊沢 泰人	ファイザー株式会社 執行役員 経営政策管理本部長

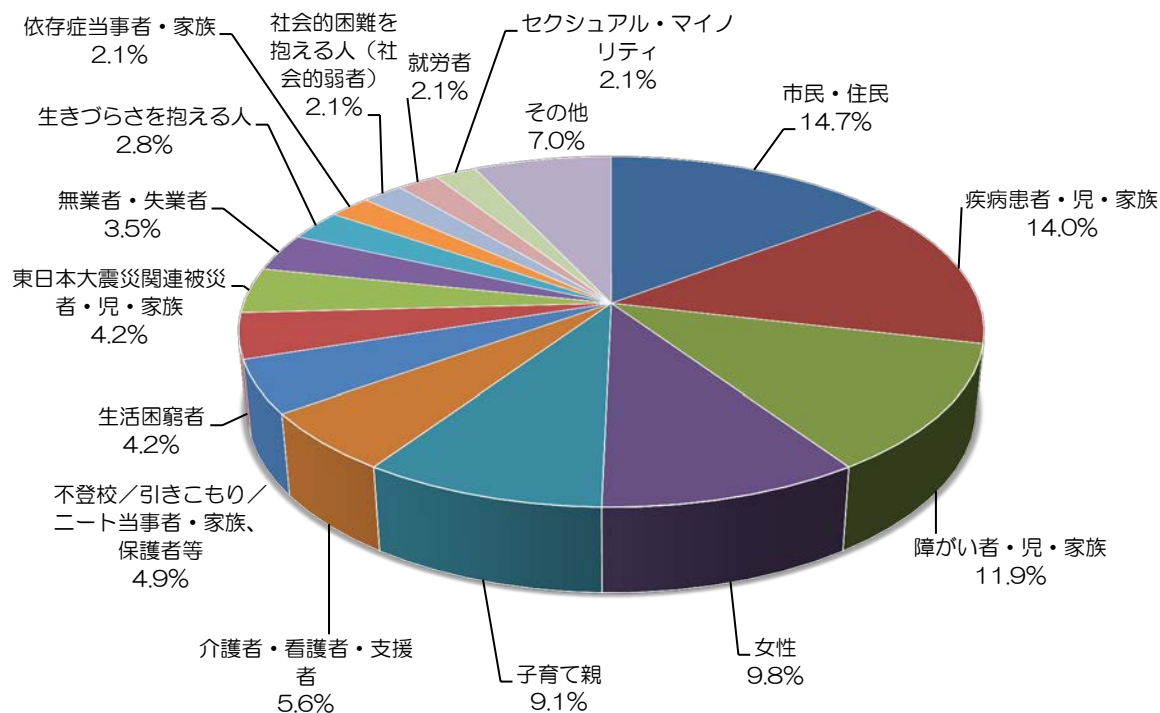
2015 年度 新規助成 応募状況

1. 団体所在地



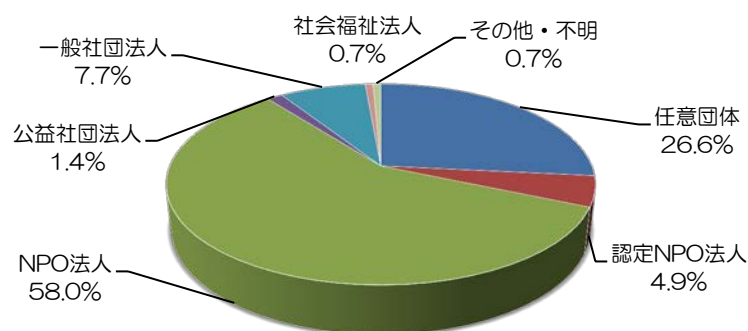
都道府県	団体数	都道府県	団体数
北海道	4	三重	1
青森	0	滋賀	1
岩手	2	京都	5
宮城	4	大阪	8
秋田	3	兵庫	5
山形	0	奈良	2
福島	2	和歌山	1
茨城	0	鳥取	0
栃木	1	島根	1
群馬	0	岡山	0
埼玉	4	広島	0
千葉	3	山口	1
東京	42	徳島	1
神奈川	10	香川	0
富山	1	愛媛	1
石川	1	高知	3
福井	1	福岡	4
新潟	1	佐賀	1
山梨	3	長崎	1
長野	4	熊本	1
岐阜	1	大分	1
静岡	1	宮崎	1
愛知	12	鹿児島	1
		沖縄	3
		計	143

2. 支援対象の分類

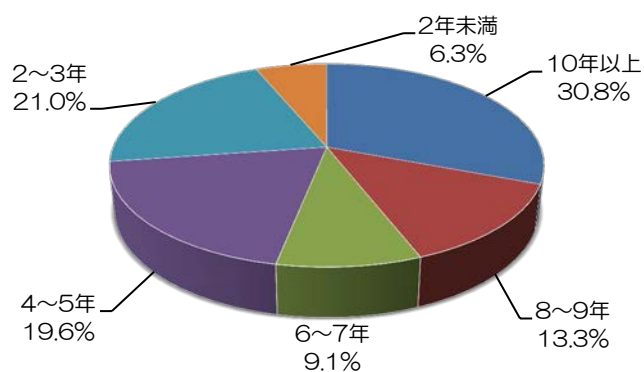


3. 組織形態

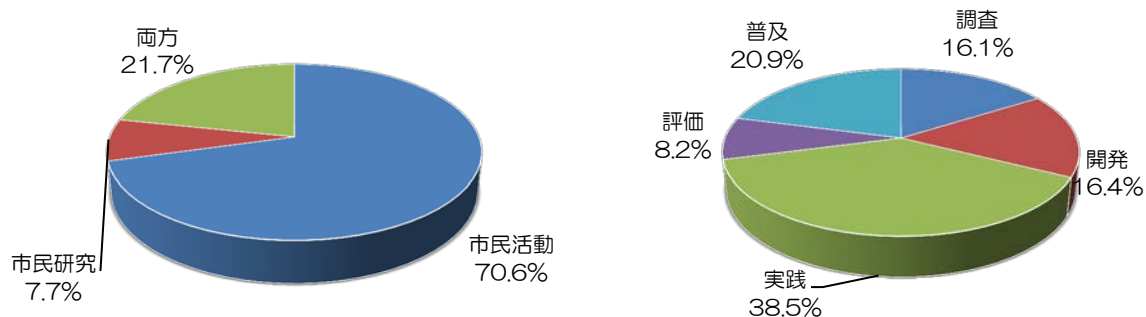
○法人種別



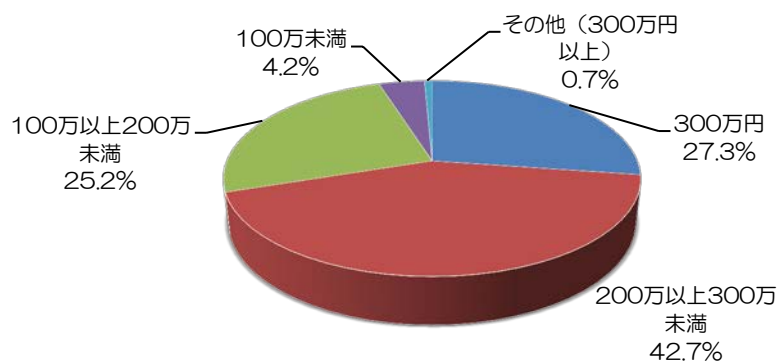
○活動年数



4. 応募種別



5. 応募金額



2015 年度助成対象プロジェクト一覧
 ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援
 ー新規助成(助成1年目)ー

	活動	研究	プロジェクト名	団体名	代表者	所在地	助成額 (万円)
1	○		スティグマに苦悩する HIV 陽性者の「生きる力」を培う支援システム創出	HIV Futures Japan プロジェクト	井上 洋士	東京	203
2	○		セクシュアル・マイノリティの中堅世代困難層に向けた HIV 検査同行とサポート	クライシスサポートセンター nolb	濱中 洋平	東京	150
3		○	デート DV の実態から女性の生きづらさと適切な支援方法を明らかにするための研究	認定特定非営利活動法人 エンパワメントかながわ	阿部 真紀	神奈川	212
4	○	○	中堅世代のセクシュアル・マイノリティの就労環境に関わる相談支援事業	特定非営利活動法人 PROUD LIFE	安間 優希	愛知	100
5	○		中堅世代の介護離職予防プログラムの開発及び介護相談コンシェル設置	特定非営利活動法人 HEART TO HEART	尾之内 直美	愛知	250
6	○		視覚障害者の「化粧をしたい！」を応援するプロジェクト	日本ケアメイク協会	大石 華法	大阪	209
7	○		DV 被害等による生きづらさを抱えた女性のための居場所づくり事業	認定特定非営利活動法人 女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ	正井 禮子	兵庫	156
8	○		ハーブづくりによる心の健康と豊かな暮らしを考えるヘルスケアプロジェクト	一般社団法人 新しい自立化支援塾	森本 初代	徳島	220
助成総額[8 件・合計] 1,500 万円							

(2015 年度の助成期間は、2016 年 1 月 1 日～12 月 31 日です)

2015 年度助成対象プロジェクト一覧
 ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援
 ―継続助成―

	活 動	研 究	プロジェクト名	団体名	代表者	所在地	助成額 (万円)
《助成2年目》							
1	○	○	孤立した困窮者を連携・寄り添い型で支えるための支援組織のネットワークづくり	認定特定非営利活動法人 茨城 NPO センター・コムズ	横田 能洋	茨城	248
2	○		障がい児とその家族を支えるための「家族の再生」プロジェクト	特定非営利活動法人 文化・福祉・人権サポート アエソ ン	政本 和子	兵庫	175
3	○		地域自立生活支援コミュニティスペースの再生	ほっとスペース おり～ぶ	廣井 朋映	兵庫	177
《助成3年目》							
4	○		東日本大震災と原発不安からの心と体の健康回復プロジェクト	特定非営利活動法人 いわき緊急サポートセンター	前澤 由美	福島	239
5	○		ヘルスケアファーム事業からコミュニティづくりへの発展を目指して	特定非営利活動法人 さいたま自立就労支援センター	菅田 紀克	埼玉	96
6	○		中堅世代がん体験者の心とからだを元気にするネットラジオ・コミュニティ	特定非営利活動法人 ミーネット	花井 美紀	愛知	120
7	○		劇場型大混浴銭湯 2016	特定非営利活動法人 月と風と	清田 仁之	兵庫	220
8	○		沖縄県北部圏域の療育ファミリーを総合的に支援するプロジェクト	特定非営利活動法人 療育ファミリーサポートほほえみ	福峯 静香	沖縄	225
助成総額〔8 件・合計〕							1,500 万円

(2015 年度の助成期間は、2016 年 1 月 1 日～12 月 31 日です)

新規助成の選考経過と助成の特徴

新規助成選考委員長 稲沢 公一

はじめに

このたび、縁あって、新規助成の選考委員長を務めさせていただくことになりました。今では、大学で社会福祉学を講じておりますが、20余年前までは、精神障害者のご家族たちが設立された全国組織で、「事務局員」兼「相談員」兼「研究員」として、ご家族や当事者の方たちとともに啓発活動に取り組んでいました。

そもそも市民活動・市民研究は、いずれも誰かに言われて行なうようなものでもなければ、やったからといって報酬が得られるようなものではありません。そこには、誰かがやらなければならぬといった使命感ゆえの「尊さ」と「もろさ」があります。

市民活動・市民研究のもつ「尊さ」を最大限に活かしながら、「もろさ」を少しでも支えていくのが、このファイザープログラムであるとお聞きし、微力ながらお役に立てるならとお引き受けすることにいたしました。どうぞよろしく願いいたします。

選考経過と助成の特徴

選考は、下記の日程および手続きにより実施しました。その過程で、目についた特徴を思いつくままにいくつかあげさせていただきます。

「楽しさ」

市民活動は、そもそも既存のシステムでは対応されていない問題や課題について、誰かが引き受けて、やむにやまれぬ事情をかかえていることも多いため、どことなく悲壮感が漂っていることも少なくはありません。そんな中で、楽しそうだなとか、きっと当事者の方たちが元気になるだろうな、といった前向きな印象を与えるプロジェクトは、とても魅力的に見えます。

今回でいえば、「視覚障害者の『化粧をしたい！』を応援するプロジェクト」（日本ケアメイク協会）がそれにあたります。女性が美しくなることは素敵なことであるという、いわば当たり前ともいえる前提のもとで、「化粧をしたい！」という願いがストレートに伝わってきて、高い評価を得ることになりました。

「外向き」

市民活動では、問題や課題の身近にいる当事者やご家族によって担われることが多く、外部の無理解ともあいまって、どうしても内向きになりがちです。そんな中、ピアの団体および活動はそのまま維持しながらも、外向きの団体を別に立ち上げ、専門家や行政とも連携しつつ企業を巻き込み、行政や企業のニーズを満たす可能性のあるプロジェクトには、社会的な意義が感じられます。

今回でいえば、「中堅世代の介護離職予防プログラムの開発及び介護相談コンシェル設置」（HEART TO HEART）がそれに該当します。もともとは認知症家族会というピアの団体でありながらも、別法人を立ち上げ、専門家や行政と連携しながら活動を展開して、企業を巻き込んでいこうとする外向きの姿勢が意欲的な試みと評価されました。

「データ」

市民活動を担う人々は、対象となる問題や課題について、自分たちこそが一番よく知っていると思いがちです。もちろん、その通りなのですが、自分たちが熟知しているからこそ、外部に対して説明する努力を怠ってしまうことがあります。そんな中、調査を行なって独自のデータを収集する、あるいは、何年にもおよぶ相談活動で蓄積された膨大なデータを整理することによって、客観性を確保しようという姿勢には、問題や課題の社会的な認知を呼び起こす潜在的な力を見て取ることができます。

今回でいえば、「スティグマに苦悩する HIV 陽性者の『生きる力』を培う支援システム創出」(HIV Futures Japan プロジェクト) と、「デート DV の実態から女性の生きづらさと適切な支援方法を明らかにするための研究」(エンパワメントかながわ) にそうした志向が見られました。これまで見えなかった現実が客観的に浮き彫りにされていくことを期待したいと思います。

「ニッチ」

以上の4つのプロジェクトはもちろんのこと、残りの4つのプロジェクトにも見られるのが、既存の制度やサービスからはどうしてもこぼれ落ちてしまう人々を何とか支えようとする基本的な活動目的です。それらは、いわゆるニッチ(隙間)に焦点をあて、そこに苦しみ困っている人々がいるなら、たとえ手弁当になったとしても、見捨てることだけはするまいといった気概のある活動であるといえます。

さまざまな事情でホームレスになってしまった人たち、セクシュアル・マイノリティの HIV 陽性者、就労問題を抱えたセクシュアル・マイノリティ、シェルター利用後の DV 被害者など、絶対数はたしかに多くはないものの、その抱える問題の深刻さにおいては、決して看過することが許されないような人々を対象としているプロジェクトには、決して十分とはいえないにせよ、今後も活動を継続・展開していただけるように助成させていただきたいと思いました。

今回助成を受けられた方の、今後、一層のご活躍を祈念しております。

<新規助成の選考日程および手続き>

【応募受付】6月8日～19日(応募総数143件)

↓

【予備選考委員会】7月15日(本選考対象60件を選出)

↓

【選考委員会】8月19日(助成候補7件、補欠4件を選出)

↓

【現地ヒアリング】9月上旬から中旬(事務局による団体訪問とヒアリング)

↓

【委員長決裁・選考結果】10月上旬(助成件数8件、助成総額1,500万円を決定)

*上記プロセスと並行して、ファイザー社内担当部署による、医薬品業界・社内規定および関係法規に基づくコンプライアンス確認作業を実施。

新規助成対象プロジェクトの概要と選考委員会推薦理由

【新規助成】

- (1) プロジェクト名： スティグマに苦悩する HIV 陽性者の「生きる力」を培う支援システム創出
助成種別： 市民活動
団体名： HIV Futures Japan プロジェクト
代表者名： 井上 洋士
主な活動地域： 東京都

HIV 感染者の 2014 年の新規報告件数は 1,091 件で、2008 年 (1,126 件) をピークとして、2007 年以降、年間 1,000 件以上で推移している^{※1}。一方、医療の進歩により、HIV 感染症は、完治はしないものの、長期療養が可能な病気となり、HIV 陽性者が疾患を抱えながら生活するうえで、新たな課題が出てきている。

本プロジェクトは、HIV 陽性者に関する調査結果から課題として明らかとなった当事者の「生きる力」を育むため、HIV 陽性者の心理や社会的な課題に関する情報ウェブサイトの構築、多様な市民を巻き込んだまちづくりセッション、当事者同士の交流会に、複数の HIV 支援団体が協業して取り組む。

首都圏だけでなく、複数の地域にわたる横断的なプロジェクトが、当事者のエンパワメントを支える地域コミュニティの拡大につながるよう期待したい。

(※1 参考：エイズ動向委員会報告)

- (2) プロジェクト名： セクシュアル・マイノリティの中堅世代困難層に向けた HIV 検査同行とサポート
助成種別： 市民活動
団体名： クライシスサポートセンター nolb
代表者名： 濱中 洋平
主な活動地域： 東京都

本団体は、セクシュアル・マイノリティのセックスワーカー（性労働従事者）を対象としたアウトリーチに取り組み、HIV 感染や性感染症の予防啓発や予防行動介入に取り組んできた実績を持ち、最も声を上げにくい当事者を対象として、先駆的な支援活動を行ってきた。

本プロジェクトは、新規 HIV 感染／エイズ患者報告数が最大と言われる中堅世代（30 代～50 代）のセクシュアル・マイノリティの困難支援というニッチな社会課題に取り組み、HIV および LGBT 支援に携わる当事者メンバーでチームを形成し、HIV 検査の啓発活動や検査機関への同行支援を行なう。また、継続的な受診を促し、生活全般の相談にも寄り添いながらフォロー対応するなどが計画されている。

プロジェクトの実効性や、柔軟に多角的に展開できる可能性が評価された。助成により実践活動が推進され、社会的な理解が進むよう期待したい。

(3) プロジェクト名： デート DV の実態から女性の生きづらさと適切な支援方法を明らかにするための研究

助成種別： 市民研究

団体名： 認定特定非営利活動法人エンパワメントかながわ

代表者名： 阿部 真紀

主な活動地域： 神奈川県

デート DV は、中学生や高校生などティーンエイジャーが主たる対象者と思われがちだが、実際は 20 代～50 代が 8 割以上を占める。婚姻関係の無いパートナー間で発生するデート DV は、教育現場の介入が期待される若年層や DV 防止法の対象となる既婚者と異なり、職場など外部からの介入が困難であり、経済的・社会的な孤立に追い込まれる深刻なケースも多い。

本プロジェクトは、2011 年から本団体が開設している「DV110 番」の電話相談記録を分析し、デート DV の被害実態や生活に及ぼす影響など、中堅世代の女性の生きづらさを明らかにする。また、分析結果に基づき、相談記録シートを新たに開発し、デート DV 被害に遭った中堅世代女性へのより適切な支援方法を体系化し、相談対応に活用するものである。

市民研究によって中堅世代のデート DV の実態とその支援策が明らかとなるよう期待したい。

(4) プロジェクト名： 中堅世代のセクシュアル・マイノリティの就労環境に関わる相談支援事業

助成種別： 市民活動・市民研究

団体名： 特定非営利活動法人 PROUD LIFE

代表者名： 安間 優希

主な活動地域： 愛知県

本団体は、2012 年より、セクシュアル・マイノリティのための電話相談「レインボーホットライン」に取り組んでおり、当事者の性志向や性自認についての悩みが多く寄せられるなか、30 代以降の中堅世代では家族関係や職場関係についての悩み相談が増えることが分かっている。

本プロジェクトは、セクシュアル・マイノリティの就労問題に特化した電話相談と個別相談、直接支援を行なうと共に、当事者の就労状況に関する調査と企業への啓発活動を行ない、就労環境の改善を通じて、中堅世代の当事者のメンタルヘルスと生活状況の改善を図ろうとするものである。

近年、注目されているセクシュアル・マイノリティ支援であるが、社会的認知を得るところで留まっている。当事者の就労に関する課題は重要な社会テーマであり、今回の取り組みによってその課題が明らかとなり、職場での理解や受け入れ態勢が促進されるよう期待したい。

- (5) プロジェクト名： 中堅世代の介護離職予防プログラムの開発及び介護相談コンシェル設置
助成種別： 市民活動
団体名： 特定非営利活動法人 HEART TO HEART
代表者氏名： 尾之内 直美
主な活動地域： 愛知県

高齢者人口の増加に伴い、中堅世代が仕事と介護の両立に悩み、介護離職に追い込まれるケースの増加が危惧されており、企業にとっても中核を担う中堅世代の介護離職による損失は大きい。

本プロジェクトは、家族介護者のニーズをヒアリング調査から明らかにし、介護離職予防プログラムを開発し、企業の経営者や社員を対象に研修を実施する。また、介護相談コンシェルを団体内に設置し、家族介護者や企業からの相談体制の確立を目指す。

本団体は愛知県において認知症の当事者および家族への支援を長年にわたり蓄積しており、堅実なプロジェクト推進が期待できる。また、本プロジェクトは介護離職を社会全体の課題として捉え、家族介護者の支援のみならず、企業への働き掛けも行ない、介護離職を予防しようとする点に意義があり、NPO と企業の新たな協働モデルとなるよう期待したい。

- (6) プロジェクト名： 視覚障害者の「化粧をしたい！」を応援するプロジェクト
助成種別： 市民活動
団体名： 日本ケアメイク協会
代表者名： 大石 華法
主な活動地域： 大阪府

人生の途中で視覚障害を負った人たちは、近年、音声ガイドによるパソコン操作技術を取得することで、再び就労等による社会参加を進めることが可能になった。これに伴い、外出の機会も多くなった女性たちからはメイクの要望が高まっている。

本団体は、視覚障害に関わるネットワークの広さから、全国的な動きが展開できる組織であり、ブラインドメイクについての確かな実績も持っている。本プロジェクトは、化粧法が学習できるeラーニングサイトを構築し、配信するものだが、コミュニティサイトとしての活用も考えられている。

メイクすることで視覚障害のある女性たちに心の張りをもたらし、実際にその化粧法を見ても聞いても理解しやすいよう、障害の多様な状況（全盲・弱視・先天性・中途）を考慮し、工夫を凝らしている点が評価された。

(7) プロジェクト名： DV 被害等による生きづらさを抱えた女性のための居場所づくり事業

助成種別： 市民活動

団体名： 認定特定非営利活動法人女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ

代表者氏名： 正井 禮子

主な活動地域： 兵庫県

本団体は、1992年に活動を開始し、1994年に家庭内での暴力被害に苦しむ女性のための支援拠点を開設した。阪神・淡路大震災の影響により閉鎖となったが、2001年のDV防止法制定後、同行支援とサポーター養成講座を開始し、2004年には民間シェルターを開設した。

本プロジェクトでは、シェルター後の回復支援のための場として2013年に開設したWACCA (women and children care center) において、DV被害等により生きづらさを抱えた女性の心のケアや就労準備支援等に取り組む。また、WACCAの利用者への調査を行ない、シェルター退所後の居場所づくりとケアの有用性を社会に発信する。

現在の制度では十分に行き届いていないシェルター退所後の女性と子どもへの支援が継続的に行なわれるとともに、公的支援や制度化に向けた政策提言、ソーシャルアクションにつなげていくことも期待したい。

(8) プロジェクト名： ハーブづくりによる心の健康と豊かな暮らしを考えるヘルスケアプロジェクト

助成種別： 市民活動

団体名： 一般社団法人新しい自立化支援塾

代表者名： 森本 初代

主な活動地域： 徳島県

近年の生活困窮者の問題において、心身不調のため自立が困難な中堅世代のケースが目立つようになった。本団体は、生活困窮者に対し、就労訓練の場を提供するなどの実績をもつが、今までの活動経験から、一般的な就労支援だけでは解決が及ばず、根本的な自立のために「心身の健康回復」が大切と考え、今回のプロジェクトが企画された。

就労支援に心身の健康回復の視点をもったことは重要なポイントであり、その手立てとして、ハーブ栽培により心をいやす「園芸療法」を取り入れたこと、さらに育てたものを売る喜びの体験や地域住民と交流できる場の提供など、生活困窮者の社会参加を進める仕組みづくりを評価した。

この中間的就労訓練プロジェクトが今後も継続できるよう、経済的に自立する手立てを強化し、徳島ヘルスケアモデル事業となることを期待する。

継続助成の選考経過と助成の特徴

継続助成選考委員長 武井 秀夫

はじめに

今年度は「中堅世代の心とからだのヘルスケア」に重点課題を絞り込んで3年目になる。この間に、「子育て世代」であり「介護世代」でもある、「中堅世代」を取り巻く社会環境の悪化と負荷の増大は厳しさを増しているように見える。ファイザープログラムは、第2期が開始された2007年に、新たに「ヘルスケアを重視した社会の実現に関する課題」を取り上げ、2013年にはそれを「中堅世代」への支援に絞り込んできたが、現今の「中堅世代」を取り巻く状況を見ると、それが「ヘルスケアを重視した社会の実現」へ向けての必然的な絞り込みであったと納得させられるものがある。

ファイザープログラムは、先駆的、独創的で、社会的意義が大きいが、未だ公的セクターなどからの支援が得にくい取り組みの社会的認知と、その取り組みの自立に向けた支援、そして、それぞれの取り組みを通じた、それを担う市民活動団体の組織的成熟に向けた支援の3つを柱としてきた。独創的で、新規性の強い取り組みには、新たな発見や予め想定することが困難な関連課題がつきものだが、それは取り組みの質的転換や発展の契機になるだけでなく、団体が組織として成熟していく契機にもなる。ファイザープログラムは最長3年までの継続助成を実施してきたが、それは、成熟した市民活動組織の間に生まれる多様な横のつながりが、将来の日本社会へのポジティブな展望をもたらし得ると期待するからである。

選考経過

今年度の継続助成では継続3年目の応募で2種類の課題設定が並存している。また、2012年度以前に新規助成を受けた団体にとっては今年度が継続助成への最後の応募機会でもあった。応募数は、継続2年目が6件、継続3年目が7件（2012年度以前からの継続Aが2件、「中堅世代」への支援に絞り込んだ2013年度以降からの継続Bが5件）の計13件である。選考委員には前もって応募書類を基に仮評価をお願いし、9月26日の13団体すべてのプレゼンテーションの後に、最終的な評価を提出していただいた。その後、5名の選考委員の間で1件1件その最終評価と評価理由について意見を交換し、助成対象を決定した。助成対象として採択されたのは継続2年目が3件、継続3年目が5件（継続Aが1件、継続Bが4件）、計8件である。継続3年目の応募に評価の高いものが多かったことを考えると妥当な結果といえよう。なお、助成総額は1,500万円である。

継続助成の選考はいつも困難さを抱えている。すでに助成を受けているという点で、それぞれの団体が取り組む課題の重要性や緊急性には議論の余地がない。進行中のプロジェクトへの取り組みの真摯さも、応募書類からひしひしと伝わってくる。取り組みの継続性や発展的展開への期待等を含め、評価するポイント、評価できないポイントを明確にしながら議論を進めては行くのだが、それでも決定は容易ではない。結局、進行中の取り組みに重要な改善の余地がある、また、そこからのフィードバック等から発展的展開につなげるなどの点で課題が残る案件や、新しい展開への組織体制が十分調っていないと判断された案件について、今年度の助成を見送ることになった。

助成の特徴

継続2年目で評価の高かったのは、「茨城NPOセンター・コモンズ」と「文化・福祉・人権サポート アエソン」のプロジェクトである。前者は、団体自体が先日の水害の被災当事者になりながら、生活困窮者自立支援法の形骸化が早くも露わになっている状況と水害による生活困窮者の急増という状況に即して、プロジェクトを実質的に前進させていくという、力強い展望を示された。また、後者は、支援対象者の現実に合わせてプロジェクトの方向を柔軟に調整してきており、今後も支援者に寄り添った丁寧な支援が期待される。

継続3年目の中で特に評価が高かったのは「いわき緊急サポートセンター」のプロジェクトである。本団体は、原発事故の、歳月の経過と共に顕在化する様々な影響の下で、不安を多く抱える子育て世代を対象とした相談事業と、行政を含めた地域のネットワーク作り、そしてそれらを担う人材養成を進めつつあり、その活動に対しては民間、行政を問わず信頼が厚い。組織としての成長と、それに裏打ちされた自信、そして、ここまでの取り組みから得た教訓や反省点を十分に活かした来年度の活動計画は、選考委員全員から高評価を得た。その他、沖縄県の南北の地域性の違いや、親世代の障がい観の違いを乗り越えて、北部地域に根ざした組織作りを成し遂げつつある「療育ファミリーサポートほほえみ」、卓越した市民感覚と独創的な発想でお風呂場からのコミュニティ作りを展開しつつある「月と風と」のプロジェクトも高評価を得ている。

今年度の助成の一つの特徴は、評価の高さイコール助成額には必ずしもなっていないことである。予算との兼ね合いで、すでに活動として一定の完成度を達成していると判断されたプロジェクトについては減額させていただかざるを得なかったからである。

<継続助成の選考日程および手続き>

【応募受付】7月27日～8月7日（応募総数13件）

↓

【選考委員会】9月26日（応募団体によるプレゼンテーション実施）

↓

【委員長決裁・選考結果】10月上旬（助成件数8件、助成総額1,500万円を決定）

*上記プロセスと並行して、ファイザー社内担当部署による、医薬品業界・社内規定および関係法規に基づくコンプライアンス確認作業を実施。

継続助成対象プロジェクトの概要と選考委員会推薦理由

【継続助成 2 年目】

(1) プロジェクト名： 孤立した困窮者を連携・寄り添い型で支えるための支援組織のネットワークづくり

助成種別： 市民活動・市民研究

団体名： 認定特定非営利活動法人茨城 NPO センター・コモンズ

代表者名： 横田 能洋

主な活動地域： 茨城県

今年の 4 月から施行された生活困窮者自立支援制度は、相談支援窓口の設置は約半数の自治体に留まり、任意事業である就労支援については 28%の自治体の実施に留まっている。

本プロジェクトは、茨城県内に生活困窮者支援に関わる NPO、社会福祉協議会、行政、事業者の連携の土台を作り、各地で伴走型の中間就労支援の仕組みを作り、官民連携によるきめ細やかな相談支援体制の構築を目指すものである。折しも、2015 年 9 月に発生した関東・東北豪雨により未曾有の被害を受けた茨城県常総市は、さらに生活困窮者の増加が見込まれ、在住外国人を含む被災した住民の生活再建に向けて官民一体となった支援が急務となっている。

助成 2 年目となる今回、困難な環境下であるが、中間支援組織として実績のある本団体が県内の関係者とのネットワークをさらに強化し、災害からの復興と就労支援事業のモデルが構築されるよう期待したい。

(2) プロジェクト名： 障がい児とその家族を支えるための「家族の再生」プロジェクト

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人文化・福祉・人権サポート アエゾン

代表者名： 政本 和子

主な活動地域： 兵庫県

本団体は、全ての人が健やかに暮らすことができるよう、文化・福祉・人権がリンクしたまちづくりを目指し、障がいのある人の相談支援や地域活動支援を行なっている。

助成 1 年目は、障害受容の初期段階にある就学前後の子どもとその家族が支えあえる場づくりを通じて家族のエンパワメントを行ない、また、リスクやストレス等に関わるマネジメントを学ぶ機会を提供して支援者のパワーアップを行なった。障がいのある子どもと向き合い、まだ混乱の中にいる家族のために開かれている「ランチ会」を通じて、当事者家族の共同活動として「マップ作り」が提案されたことは興味深い。

助成 2 年目となる今回は、当事者家族に対するエンパワメント活動を継続すると共に、支援者については研修によって、自発的に動き始めた当事者家族の活動を支え、家族と地域をつなぐことができる「ファシリテーション力」を身につけることを目指す。丁寧に現場に寄り添った活動が継続されるよう期待したい。

(3) プロジェクト名： 地域自立生活支援コミュニティスペースの再生

助成種別： 市民活動

団体名： ほっとスペース おり〜ぶ

代表者名： 廣井 朋映

主な活動地域： 兵庫県

本団体は、古い理髪店舗付き住宅を再活用して、こころの病などで地域に馴染めない人々を対象に居場所づくりや住民との交流の機会づくりを実践し、近所の子どもや通りがかった住民が気軽に顔を見せるなど、地域に自然に開かれた場として機能している。

助成1年目に引き続き取り組む本プロジェクトは、自立生活が困難な人たちが、地域の人たちと共に、老朽化した住宅を自らの手でリフォームすることで、地域の中での居場所の意識を高め、社会参加の意識が広がる効果が期待できる。また、背伸びせず、身近な課題に取り組み、達成感を得ながら進めている様子が感じられる。

助成2年目となる今回は、雨漏りの修繕とトイレ工事を行なうが、最終的にはコミュニティカフェの実現を目指しており、完成後の一層の広がりを期待したい。

【継続助成3年目】

(4) プロジェクト名： 東日本大震災と原発不安からの心と体の健康回復プロジェクト

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人いわき緊急サポートセンター

代表者名： 前澤 由美

主な活動地域： 福島県

2011年の東日本大震災以降、いわき市では多くの若者世代の転出や原発事故で被災した地域からの避難者の転入により、子育て世代を中心とする中堅世代の社会的責任と精神的な重圧は、益々大きくなっている。

過去2年間の助成で、本団体は子育て世代に対する電話相談、個人面談、交流サロンの開催によって、子育て家庭のメンタルヘルスの改善と地域コミュニティづくりに貢献してきた。また、本プロジェクトを通じて、当事者自らが課題を解決し、自立への意欲を持つなどエンパワメントの効果が広がってきており、地域の医療・福祉関連機関、企業との連携も進んできている。

震災以降、本団体が温かく地道な活動を続けてきた点を評価し、助成3年目となる今回のプロジェクトを通じて、多様化した家庭環境にあわせた丁寧な支援の継続と、地域の当事者同士が助け合う協力体制が実現するよう期待したい。

- (5) プロジェクト名：ヘルスケアファーム事業からコミュニティづくりへの発展を目指して
助成種別：市民活動
団体名：特定非営利活動法人さいたま自立就労支援センター
代表者氏名：菅田 紀克
主な活動地域：埼玉県

本プロジェクトは、ホームレスなど社会的弱者が、休耕地等を開墾し、農作業を通して自立生活への道を開くための支援を行ない、住みよい地域づくりを目指している。

助成3年目となる今回は、収益性のある事業を興し、また、当初想定していなかった精神障がい者や知的障がい者等がプロジェクトに参加するようになったことから、その専門的な相談対応ができる環境を整える。

過去2年間の助成で、プロジェクトの形は整いつつあり、運営は安定感を増している。若い後継者も出てきており、世代交代を含めて、プロジェクトの発展・自立に向けた助成最終年となるよう期待したい。

- (6) プロジェクト名：中堅世代がん体験者の心とからだを元気にするネットラジオ・コミュニティー
助成種別：市民活動
団体名：特定非営利活動法人ミーネット
代表者名：花井 美紀
主な活動地域：愛知県

本団体は、がん患者がより良い医療とサポートを受けられるよう、がん体験者のピアサポーターの養成に取り組み、相談情報サロンを運営している。

助成1年目は、がん体験者らがインターネットラジオの番組を制作し、就労などでピアサポートや情報支援が得られ難い中堅世代のがん患者に、いつでもどこでも聞くことができる情報発信の仕組みを構築した。助成2年目は、医療や就労支援の専門家の協力も得て番組の内容を広げ、がん患者それぞれの多様な悩みに応えられるよう、質の高い番組作りを心がけたことから、リスナー数は飛躍的に伸び、医療関係者が患者に視聴を進める動きも出てきた。

助成3年目となる今回は、ピアサポーターなど番組制作者の負担を軽減するため、より効率的に番組作りが行なえる環境整備に取り組む。今後は自主財源の確保も見据えた仕組み作りと、がん患者を取り巻く医療や就労環境の急速な変化を適切に捉えながら、多様な価値観に応えられる番組作りを期待したい。

(7) プロジェクト名： 劇場型大混浴銭湯 2016

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人月と風と

代表者氏名： 清田 仁之

主な活動地域： 兵庫県

重度心身障がい者を対象に、誰もがほっとする場である「お風呂」をステージとし、人と人のつながりを体感する本プロジェクトは、2012年度と2013年度の助成を含む過去3年間の活動で、その発想力と次々と人を巻き込んでいく実行力が高く評価された。そして何より、参加者がみな思いを一つにしながらかつ笑顔にあふれていることがプロジェクトの成功を物語っている。

助成3年目は、さらにプロジェクトの対象者を生きづらさのある・なしに関係なく、商店街、高齢者施設、浴場組合等の共感を得ながら、地域全体の活動に広げようとしている。重度心身障がい者をはじめ、生きづらさを抱える人たちへの支援は、ともすると支援する側、される側の二者間で閉鎖的になりがちとなるが、本プロジェクトはその閉塞感をブレイクスルーする可能性が感じられる。

今後、この活動をさらに社会に発信し、本プロジェクトに共感する当事者や支援者と価値を共有しながら、新たな展開に向けたアイデアが生み出されるよう期待したい。

(8) プロジェクト名： 沖縄県北部圏域の療育ファミリーを総合的に支援するプロジェクト

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人療育ファミリーサポートほほえみ

代表者名： 福峯 静香

主な活動地域： 沖縄県

本プロジェクトは、障がいをもつ子どもとその家族を継続的に支えるため、社会資源が不足する沖縄県北部地域において、相互に支え合うシステムをつくり上げようとするものである。助成1年目に沖縄県北部に拠点を確保し、助成2年目も確実にプロジェクトを発展させてきた点が高く評価された。

助成3年目となる今回は、親の会の組織基盤を固め、入浴介助サービスや不登校支援などの新規事業を開拓しようとしており、積極的な姿勢が評価された。障がいをもつ子どもを支える親自身が、自分たちに必要なものは何か、自分たちに何ができるのかを丁寧に話し合う中から紡ぎ出された成果と言える。

今後に向けて、行政や他団体との連携、共同事業の推進等を視野に入れ、地域全体を巻き込むプロジェクトに発展するよう期待したい。